

## (翻刻)『類題三河歌集』(一)

繁 原 央

幕末に竹尾正久が中心になって編輯した『類題三河歌集』を翻刻する。刊行されたのは村上忠順の序文によれば慶應二年(1866)三月だが、羽田野敬雄の跋文に「七十翁」とあるので、敬雄(1798～1882)が70歳になるのは数えでも慶應三年(1867)になる。書肆は「松塙亭」で三河新堀(岡崎市新堀町)の深見藤吉である。豊橋市立中央図書館橋良文庫をはじめ、12箇所の図書館に所蔵されているが、翻刻はされていないので、ここに活字にする。本稿には春と夏の部を収める。

## 類題三河歌集 上(表紙題簽)

賀茂正久大人輯

類題三河歌集

松塙亭蔵板(表紙裏)

参河歌集序

いなむしろみかはの國はいさなとりうみつ道のひとつにしてたまきはるうちつ国にちかきものからいそのかみふるき世にはみやびたる人もなかりしにや三河人の歌とてはを、さ、きこえずなむ乃楽の葉の名におふ宮のうたふみなる東歌の中にもとほつあふみよりひむかしの國々はのせ(序1オ)たれと参河は見えずか、れは遠淡海よりひむかしをあつまといふへくや其はいかにもあれ三河人とてもなとかみやびの道にこ、ろさ、ざらむひな人とてもいかで歌よむ事のなからさらむこのころ此集を見れば作者五百人はかり歌は千五百

首にあまれりこれか中にはただ萬作か如きいふかひなきかいなてなるもあれと又一ふし(序1ウ)よみ出たるはたなきにしもあらねはうたよむ人のたえてなしとはいひかたくやあはれめでたきかもこれのうましうたあはれいそしきかもこれのうましふみかくてこの集小松原のまつ葉ちりうせず矢矧の橋なかくつたはらは五十ら首かさきのかひありて高蘆山の高きいさをになむありけるこれ序をさまれる御代のさちにていにしへよりも学の(序2オ)道のみさかりになりぬるしなりけるさてこそ浪速武蔵野稻葉吉備などのみやひふみを見るか如くに世にもてはやすへけれあなめてたのわさや

慶應二年三月

村上忠順(序2ウ)

凡例

此ふみこ、ろさすところはすくれたるうたのみひらひいてむとにはあらず此道にこ、ろさしふか、りしもなき人となりて世にしられすなりぬへきと初学の輩のはけみてよみ出ぬへきとをおもひてなれはいたくめてたからぬをもいれたり又もれたらんひともあるへしき、いてむまに、二編に撰いるへし(1オ)○はやく世におこなはれたる鰻玉賀茂川鶯蛙武蔵野玉藻これらの歌集に出たる歌はいれす詠史のうたは蓬廬主の川藻集に出せり本國名の歌は名所歌集を近きほどに撰ひ出へければ是もいたさず長歌文章もあまたあれとおほ

くは二編にいたすへし

○女は舊里かたの家名を称る事にしへの例  
也されと数多の人々の中には故人もありて」  
(1ウ)とみにしらへかたきもあれは見やす  
きまゝに夫の家名にしるせり  
○おのれかく物するをともにえらひかうかへ  
たゝしたるは寺部宣光釋公阿村上忠順中山繁  
樹四人の先輩なり

竹尾正久識」(2オ)

(白紙)」(2ウ)

### 參河歌集

春

立春 天の戸の明ぬと告て鳥か鳴東路よりそ春は立ける 源信順朝臣  
山川の水もけさは解初て岩越波に春風そふく 源朝臣利善  
明わたる空に霞の薄にほひほのめかしてもきたる春かな 源朝臣忠敏  
へたてなき天つみ空の朝霞夷の國も春や到らむ 青龍寺古道  
おひはかり霞み初けり石川のこまの渡に春や立らむ 村上忠順  
久方の雲の通ひち霞む也天つ少女も春や到らむ 大清水英棟  
ほのゝと明行空の影みえて水の底にも春立にけり 深見篤慶  
年々に花咲にほふ山松の木間めにつく春は来にけり 石川千濤」(3オ)

元日 見も聞もめてたきものは万代の春の始のけふにそ有ける 中山美石  
けふよりは春の日影ののとけさに人の心も明らひ初らむ 寺部宣光

元日雪 行通ふ人も真袖をふる雪のみのしろ衣きたる春哉 橋本弘道

腹赤魚 たてまつる魚の名におふますゝに御世長濱の例成らむ 富田常業

国栖奏 くす人の笛のねこそは萬代もかはらぬ春のしらへなるらめ 成瀬廣冬

初春 けさはまつ梅の御壺に鶯の春と鳴音を聞えあくらむ 中島隆功  
朝日影にほふ霞の薄衣のとかにきたる春の初空 西村多米女  
うれしさは老の心もうなるこに立帰りにしけさの春哉 宮路恒雄

初春霞 立初る霞の袖もうら安の国ふりしるくゆたか也けり 岩上登波女

初春梅 去年の冬咲にし梅をあらためてかさすは春の心也けり 松下鳩臺」(3ウ)

早春 さほ姫や年のいそきにおくれけむ霞の衣けさくはるなり 矢野政弘  
硯の海こほらぬけさは打むかふつくゑの嶋も春めきにけり 竹尾正久

早春天 とけぬらん天の真名井の水をもなかるゝ空の霞にそ寄 中山繁樹

早春水 山川や瀬はまた浅き春なからなかるゝ水はのとけかりけり 荻野元明  
根芹つむ澤田の水打とけて水も緑にかへる春かな 中村松窓

早春鶯 姫小松引にこし野を先しめてけふを初ねと鶯の鳴 釈公阿  
春そとはいかて到らむ雪の内にすたちの小野の鶯の声 内田信由

春生人意中 鶯の初音鳴つるあしたより人の心そ花になり行 釈音空  
松竹増春色 九重の御垣の松もかは竹もひとへにしるき春のいろ哉 柴田顕光

松舎春色 住の江に年ふる松もひとしほの春のいろこそかはらさりけれ 釈龍光(4オ)  
 瀧音知春 こほりゐしつゝみの瀧やとけぬらむ春のしらへにおとそ流るゝ 釈一翁  
 春風解氷 春風に氷とけ行谷川の浪の初花けさ咲にけり 釈周観  
 毎日常有春 つみて来しきのふのねせりさかなにてけふは霞にゑひくらしつゝ 繁樹  
 卯仗 たてまつるけふの卯仗のつくゝとおもふもとほし君か千とせは 美石  
 子日 鶯の初音なからに春の野のけふの小松をひくよしもかな 浄円寺大炊女  
 いさわれものへに遊はん大宮のちひさ小舎人小松ひくめり 忠順  
 小松おふる野守か庵は子日にもひかて軒端に千代はしむらむ 宣光  
 子日鶴 初春の子日の小松ひくま野におりゐてあそふ千世の友鶴 柴田厚女  
 若菜 鶯に梅はまかせて水ぬるむ澤田の根芹けふは摘てん 忠敏  
 さむけれと春とおもへは野へに出て氷る袂に若なをそつむ 長尾波都女(4ウ)  
 雪中若菜 つみ置しかたみのみゆきかつ消てたまりかてなるのへのわか菜か 村上貞女  
 消のこる雪またふかし心あてにつまはつみてんのへのわか菜を 児玉湖濤  
 野若菜 里遠きのへのわか菜は春くれと雪よりほかにつむものそなき 田村豊充  
 海辺若菜 蟹の子も波の花貝よそにしてけふ七種の若菜摘なり 松枝峯子  
 田若菜 芦たつの氷くたきし跡とめて千代田の根芹いさやつまゝし 忠順  
 小山田のこほり流るゝひまとめてつむ手にぬるむ水のふか芹 大原景親  
 かたまもてねせり摘にとくる子らにけふもとはれぬ小山田の庵 深見篤行  
 鶯 鶯のこてふにゝたる声なくは花なき里を誰か問まし 寺部美都女  
 山川の氷は春を知ぬまに打とけゝりな鶯の聲 佐藤重見  
 春の日の長きをおのか心にて鳴ねのとけきのへの鶯 竹尾正貞(5オ)  
 鶯のもゝさへつりを友として長き春日をけふも暮しつ 釈徳裔  
 待鶯 我宿に来なけ鶯このあさけ隣の梅は咲そめにけり 鈴木重節  
 鶯遅 鶯はいまた来鳴す梅か香をしるへの風やいつち吹らむ 中山豊村  
 初聞鶯 谷川の氷れる水はとけるのに初音を立るけさの鶯 深井資生  
 曙鶯 鶯のさやかなる音を鳴なへに花の木間もる月はしらめり 繁樹  
 くやしきもうまいしつるか鶯におとろかさるゝ明ほのゝ空 村上三千代女  
 暁鶯 梅かをる暁月よあかぬかなねくらなからの鶯の聲 忠順  
 朝鶯 けさははやふゝめる梅のはなやかに木傳ひつゝも鶯ぞ鳴 青山青翁  
 夕鶯 暮るまで鳴鶯の聲す也花の木間に宿もとむらむ 村上美志女  
 霞中鶯 あさかすみ立へたてゝ鶯の声のにはひはかくれさりけり 大橋義成(5ウ)  
 雪中鶯 かきくらし雪のふる野の鶯は梅の花笠たつねわふらん 忠順  
 野鶯 人けなき野守か庵も鶯の願いゆるさぬ春のこのころ 深見直温  
 鶯の声のかきりをつくゝしおふる春野にけふも鳴也 鈴木小鈴女  
 故郷鶯 すみすてゝ年ふるさとの人はいさ花そ昔ときなく鶯 美石  
 鶯有慶音 萬代の友と契りて鶯もおのか初音の松に鳴なり 釈賢空  
 梅 鶯や寝くらにまよふ梅の花かたえまはらに折やつしけり 村上真武  
 さえかへる雪けの風もおのつから梅の香ひに霞む頃哉 釈法空  
 朝梅 あさつゆもちらさぬほと春風に独こほれて匂ふ梅かゝ 公阿  
 夕梅 忘れめや梅の香高き梅園に月もいさよふ春の夕暮 信由

- 夜梅 春のよの花の寝覚をとふものは枕にかよふ風の梅か、 寺部多加女」(6オ)
- 闇夜梅 春のよの梅にやとかる鶯は闇にもしるき音やすむらむ 久田祐利
- 月前梅 人しれすわか身ひとつとかこつかな梅か、霞む春のよの月 村上忠幹  
梅か、や霞の袖にうつらんおほろ月よの影の匂へる 田中元里
- 雨中梅 春雨のふるをかことに折とりてかさしてゆかむ梅の花笠 菅沼定春
- 梅風 はる風はうれしきものか梅か、をせはき袖にも吹と、めけり 登波女
- 梅薰衣 たきしめぬ墨の衣も花やきぬ梅か、くゆる園の春風 公阿  
立よりて見てたにあかぬ梅か、を手をらはいよ、袖にしま、し 元明
- 折梅 色香をはしるもしらぬも梅の花折てかさらぬ人なかりけり 重見  
梅の花めつるあまりに鶯のこつたふ枝も折てけるかな 井野近知
- 窓前梅 する墨に匂ひをそへて文学ふ窓のあたりの梅咲にけり 宣光」(6ウ)
- 閑庭梅 世をうめの花の中なる隠所をよそにしらすな庭の春風 政弘
- 隣梅 中垣のあなたの梅の香をしめて袂は花のあるし白なる 登波女  
一枝といは、をしまむ梅からに垣根へたてぬ春風の吹 積仁(最後の一言なし)翁
- 名所梅 霞むよの月の桂の里とへは空にもみちてにほふ梅か、 山河兼久
- 水辺梅 梅の花今を盛の影みえてをられぬ水もにほふ比かな 岡通度
- 河辺梅 春風に散うく花の梅津川末くむ袖も香に、ほふらむ 川田利武
- 浦梅 心あるあまの衣や匂ふらむ梅の香取の袖の浦かせ 大橋義路
- 漁村梅 夕月よ梅さく浦の蟹小舟香をしるへにや漕かへるらむ 顕光
- 山家梅 折かさす人こそなけれ山里にひとり立枝の梅の初花 清水安興  
山里は何をかまたむこれその春のたよりの軒の梅か、 糟谷重信」(7オ)  
梅の花咲初しより山里は大方春のにほひ也けり 近藤政詳
- 梅花和琴上 鶯の聲のしらへのことなれば心ひかれて梅や散らむ 祐利
- 柳 春風のまつくり出す糸柳人の心やかけて引らむ 積祐巖  
我門に今を春へとうちはへてなひくもうれし青柳の糸 柴田直  
風たえて空のとかなる春の日もおのれとなひく青柳の糸 長尾節女  
黒髪にみたれあひけり妹か汲つ、ゐのものと青柳の糸 千濤
- 柳風 いと柳いと、みたれて結ひしを又吹風にとけんとすらむ 積亮禪
- 霞中柳 春風の吹ものとかにみゆる哉霞になひく青柳の糸 篤慶
- 水辺柳 六田のや川そひ柳影みれば水よりふかき緑也けり 公阿  
浪かけてあらへとあせぬ川柳いかに緑の深く染けむ 和田ゆき女」(7ウ)
- 池辺柳 池水の緑の色も、え出て風になみよる青柳のいと 安田勝政
- 海辺柳 あまの子か釣すとみしは海風にみたれてなひく青柳の糸 藤井古典
- 門柳 いとけなきすさひにさし、青柳の門おほふまで成にける哉 美石
- 春水 おり立て芹つむむらか力にもくたくる小田の薄水かな 夏目重鉄
- 残雪 鶯の声打とけし山陰にいつまで残る松のしら雪 常業
- 餘寒 春さむみ花待こともいそかれず夜比の霜に心おかれて 全
- 餘寒月 都たに雪けにくもる春の月山里いかに風のさゆらむ 和田元亨
- 霞 さほ媛やいとかなるらむ春たちて霞の衣きぬ山もなし 正久
- 朝霞 いはと山霞のとはり紅に、ほひて出る日のみかけかな 信由

遠山霞 春の色の一しほ深くみゆる哉山また山のあなた霞みて 釈太保(8オ)  
 海辺霞 和田の原こき出し舟のほともなく霞へたつる春の朝明 栗田盛之  
 関霞 道のくの衣の関をきてみれば春は霞の立へたてたり 竹尾重樹  
 行路霞 分行はたえ、きえてこし方に所かへても立霞哉 忠敏  
 霞隔遠樹 しかの浦や波ちのとかに霞あひて水上に成ぬ松の一本 村上忠浄  
 若艸 春雨のふる柴の中にもえ初てや、あをみ行のへの若艸 青翁  
     朝日さすかたの、のへの雪まより先もえ出る春の若艸 釈実言  
 雪尽草芽生 もえ出る草の緑にけたれけりまた春浅き庭の白雪 公阿  
 水辺若艸 もえ出る堤の小草池の水春は緑にかへらぬそなき 繁樹  
 若艸漸青 もえ出る小草の色もきのふよりけふは一しほ深き春哉 堀岡英斉  
 春雨 しくれつ、からしたのへを又さらに緑にかへす春の雨哉 古道(8ウ)  
     春雨のふりもやすらむ青柳のなひくとなしに露そこほる、 菅沼定敬  
 夕春雨 花のみかねくら尋ぬる鳥のねもしをれてさひし春雨の空 川村居寛  
     山里は夕けの烟末くれてしめやかに降春さめの空 服部恒泰  
 庭春雨 朝戸出の庭たちならず袖の上に梅か、なから春雨そ降 信由  
 浦春雨 降としも見ぬめのうらを行雁の声さへしめるよはの春雨 釈日遣  
 山家春雨 かけひよりあふる、水は音なしに降春雨と聞えさりけり 公阿  
 春月 うすものにつ、む鏡かとはかりに霞みてにほふ春夜の月 忠順  
     なかめつ、春や昔とおもふよりいよ、霞む月の影哉 恒雄  
     おほつかなくもるとまてはなき空の霞に、ほふ春夜の月 永宝寺豊純  
     もえわたる芹川水のぬるむより竹田の原にけふる月影 西岡長廣(9オ)  
     梅か、も臙にかすむ春のよは月にうかる、始也けり 正久  
 春月幽 つ、ましきしのひありきもこの比はいとはぬまてに霞む月哉 政弘  
 春曉月 月影は見しや其よの夢はかり霞みて残る有明の空 常業  
 名所春月 梅か、の空にみちてやすむらむ海瀬の里の春夜の月 釈義宣  
     影うつる清水にそれと知れけり臙の里の春夜の月 大橋俊人  
 山春月 さえ、し影ともみえず吉野山花の木間の春夜の月 釈亮泉  
 遠山春月 さくら狩あかて帰りし入相のかねのみたけに月そ霞める 繁樹  
 海上春月 そこはかと波路はるかに月影の霞むそ春のみるめ也ける 美石  
 浦春月 難波濁あこと、のふる声やみて霞のあみにか、る月影 政弘  
 江春月 濁なき玉江の月のくもれるは波のしたまて霞こむらむ 楠田好文(9ウ)  
 故郷春月 われのみとかへりみすれば霞みつ、月さへすまぬ故郷の空 公阿  
 帰雁 やよしはし花の錦を故郷に見てたに帰れ春の厂金 古道  
     咲つ、く高峰の花のにはほひ香をつはさにかけて厂の行らむ 菅沼幸子  
     厂金は何を常世にいそくらむ匂ふ桜の花を見すて、 加藤定宅  
     花の色をこしの白根の雪とみてしはしはとまれ帰る厂金 浅井親美  
     なかむれば霞吹とく春風に数あらはれて帰る厂金 太田田免女  
     行厂を花にと、めてみよしの、春をと、むとなすよしもかな 通度  
     春雨のふるの、澤を立厂は翅しをれて常世へや行 夏目道文  
 曉帰雁 春の夜のあけむ朝を待侘て帰るか厂の曉の聲 繁樹

夕帰雁 夕まくれ道もまよはて行厂のしをりや峰の桜成らむ 西村為周」(10オ)  
 雲間帰雁 さけはかつ散行花をかへりみぬ雲居の鴈の心高さよ 常業  
 海辺帰雁 住の江や波路かすみて行厂も菊の花咲秋な忘れそ 美石  
     是も又常世をさして水の江の海波遠く帰る厂哉 宣光  
 燕 花見むといよすかゝくるたをやめの袂くゝりて燕啼也 繁樹  
     なれてくる吾家の燕人ならはすみけむ國のこゝろや聞まし 正久  
 春風 さくら花雪と見るまで散くれと袖さむからぬ春の夕風 深見年乃女  
 春曙 梢吹あらしも白し桜散かたのゝみのゝ春の明ほの 弘道  
     咲や此花の匂ひに霞みけり難波の浦の春の明ほの 釈賢亮  
     馬はあれとかちより行も面白し木幡の里の春の明ほの 柴田鷺山  
 湖辺春望 浪にのみ声を残して辛崎や霞によわる松の春風 政弘」(10ウ)  
 雉 散露の玉の横野の朝風に声もほろゝときゝす鳴なり 長廣  
 雲雀 春の野にあさなつむ子かもすそより声頭はれて去雲雀哉 宣光  
 夕雲雀 天つたふ日影と共に空高くあかれはおつる夕雲雀哉 定春  
     春の日のおつる片野に声立て猶あかり行夕ひはり哉 釈隆啓  
     いとゆふの遊ぶ春野の夕雲雀空にうかれて床な忘れそ 生田義貴  
 春駒 打むれてあるか中にも若艸のおひさきしるき駒も見えけり 忠順  
 野遊 春の野を霞の衣たてぬきにかゆきかくゆきけふはくらしつ 登波女  
     おもふとちくれなはなけの花にねて霞めるのへの月もみてまし 常業  
     かきくらし今はとかへる春のゝに桜かさして月をみる哉 利武  
 董 少女子が家路やいつこ董つむ袖なつかしき春の夕暮 利善」(11オ)  
     ならふへきいろなき春の野月に独時めくつほ董かな 宣光  
 名所董 なつかしき妹とならひの岡にして共にすみれの花は摘てむ 忠順  
 早蕨 きゝす鳴やけのゝ原にねをとめて今はたもゆる春の早蕨 大炊子  
     花つゝしさくやみ山のめうつしに折手もまよふ初蕨かな 尾崎玄文  
     来てみれば霞けふりてさわらひのもえ出けりな萩の焼原 釈靈臺  
     柴人の妻木こるまの手すさひにかつゝたをる谷の早蕨 諦成尼  
     少女らかとりやかたまにつみためし董にまじる初蕨哉 黒柳正庸  
 桃 我宿にした照花のかくなから百代の春も匂へとそおもふ 宣光  
 三日宴 咲にほふ桃の酒杯あかぬまにはやさしそふる三日月の影 菅沼定年  
 花 ありとある木草の中に花といふ花は此花山さくら花 公阿」(11ウ)  
     もろこしに手こし植なは夜るひかる玉にもかへむ山桜花 千濤  
     よの中の人心のいろゝも花に染てはかはらさりけり 鳩臺  
     あかさりしこそその恨も忘れて今年も花に馴にける哉 小池精磨  
     さくら咲そのうれしさはさほ媛も霞の袖につゝみかぬらん 重鉄  
     春されは山里ならぬわかやとの軒にもかゝる花の白雲 釈了願  
     世中は捨し此身も花にのみ心うかれてくらす春かな 釈二浪  
 待花 咲とみる夢はよなゝ結へともまた打とけぬ花の下紐 鈴木重世  
 尋花 たつねわひみ山出れは中々に花は里より咲初にけり 白井武濟  
 初花 咲初しけさの桜は鶯のきのふ鳴つる梢也けり 鶯山

おのれ先にほひ出つ、桜花よその梢をさそひ貞なる 義宣」(12オ)

花未遍 よの人の心を花になし初てにほふ一木の山さくらかな 深見壽仙  
見花 みれははたなにはの叟も忘れぬ花やうき世の外に咲らむ 信由  
芳野河なかれて早く行物は花見てくらす日数也けり 忠敏  
年々見花 見ても、猶もみまくのほしき哉いつの春へも花にあかねは 神保光禧  
連日見花 世をいとふわれかはあやないてかてにけふも花見るみよしの、山 英棟  
処々見花 花ゆゑに住定めたる宿もなしきのふはくらまけふはさか山 村上忠明  
船中見花 角田川わたるとなしに渡船行かへりても花をみるかな 都築大成  
静對花 とふ人もなき山里のうれしさは心ちらさて花をみる哉 秋田時税  
愛花 このもとをあくとほなしにかのものさくらこひしき花盛哉 義宣  
折花 散をたにをしとおもふをさくら花たをりてかへる人も有けり 平井琴子」(12ウ)  
盛花 桜花咲の盛を見わたせは散ぬくしとおもほらぬかな 村上忠園  
暁花 明ぬとてなくやき、すの声のうちに末の、花の色そしらめる 宣光  
朝花 朧夜の月の名残もをしけれと匂ひこほる、花の朝露 英棟  
夕花 あかすしてかへる夕の山おろしうしろめたくも花にふく哉 廣冬  
鶯も枝うつりしてわかことや豆うしと鳴花の夕暮 大林真樹  
けふも又散ぬさくらのわかれしつ暮行色はえしもと、めて 古道  
月前花 よるも又月もの駒に打乗ておほろに匂ふ花やみてまし 宣光  
霞中花 つ、みあへす花もこほれて桜色に匂ふ霞のころもはる風 弘道  
名所花 芳野山花の盛にわかみれは雲の上行心ちこそすれ 森田光文  
山花 さほ姫の春の霞のたてぬきに花のあやおるはたの横山 隆功」(13オ)  
うら、とのとけき空に匂ふ哉名のみあらしの山桜花 千賀惟一  
あらし山松の木間に立わたる雲こそ花の梢也けれ 山本千秦  
あたひなき玉も錦も及はねは何にくらふの山桜はな 辻村正明  
さくら花ちらはをしほの山おろし心してふけ今盛也 高橋篤議  
たとりつ、こゆる山路の岩かとも思はぬはかり花そ匂へる 粕谷重三  
峯禁今を盛と咲花の雲にうもる、松のむら立 釈義覚

春江門にもものして

筑波山遠く霞みて隅田川堤の桜さきそめにけり 加藤千秋  
遠山花 桜花咲にけらしなむかつをにほふ霞の色のことなる 鈴木重庸  
河花 大み川峯の桜のかけおちて花の上行春の筏士 釈行聴」(13オ)  
湖辺花 咲花に昔をとへは志賀の浦やこたへもなくに春風そ吹 松崎明  
ひらのねの花うきおろす春風にさ、波かをるにほの海つら 馬嶋惟安  
海辺花 蟹の子も磯山桜咲比は世をうらへともおもはさるらん 鈴木真重  
関花 旅人のとまるをみれは咲にほふ花そなこそその関のあら垣 信由  
逢坂や夕つけ鳥の声ならて花に明行関の杉村 音空  
行路花 かさしつ、行とや人のおもふらむ垣ねつ、きの花の下道 釈寂湛  
羈中花 あかつける袖もゆかしくかをる社旅路の花のなさけ也けれ 宣光  
都花 九重の都の花をけふみれは八重に一重に盛也けり 古道  
九重の春の盛をみわたせはうへこそ花の都也けれ 竹尾重穀

都人かさしてかへる花みれは大路の春は夕也けり 英棟」(14オ)  
 舊都花 さかしけむ花の都の面かけを桜に残すしかのふる里 倉垣長貴  
 故郷花 何ゆゑに住すてけんと思ふまで我ふる郷の花咲にけり 忠順  
 閑居花 けふも又一木の桜独見て問れぬ宿の春日くらしつ 繁樹  
 山家花 雲とのみ見てや問来ぬ都人わか住山の花の盛を 美石  
     問れぬはみ山の庵の常なから人恨めしき花盛哉 仁(最後の一画なし) 翁  
     数ならぬ身をおく山のかくれかに匂ふ桜のあたらしき哉 釈慈導  
 社頭花 しめはへて神のまもれる桜花袖にかをるもかしこかりけり 顕光  
 林間花 いろもなき此み山木のかたはらに春をしめたる花さくら哉 常業  
 松間花 嵐山松も桜のひまもりし緑をくゝる花の白雲 美祢女  
 花交松 立ならふ松のよはひをさく花にゆつらはいかにうれしからまし 真木多計女」(14ウ)  
 依花待人 咲花のおもておこしに我宿を春はかわらす人のとへかし 登波女  
     咲匂ふ花のさむしろしくゝにうしなき友のまたれぬ哉 釈学空  
 花下送日 旅衣花にかさぬる日数ともしらて都に妹やまつらむ 武島真一  
     見さしてはえこそかへらぬ木の本につもらはつもれ花も日数も 公阿  
 野花留人 咲花はまねかぬものをのへに来てあかぬとも香にとゝめられけり 深見徳子  
 花下忘婦 散かゝる袖は錦をきられとも家路おもはぬ花の木の本 大村古考  
 花未飽 なれぬれはあくをならひのことわりに独たかへる山さくら哉 忠敏  
 花忘老 あすしらぬ老はわすれて咲花のあたに散なんことをのら社 川村寛容  
 花袂 嵐山さくら見にこし手弱女の袂の花もにほふ春かな 公阿  
 花時忙 野に山に心の駒ははさせても見つくしかたき花盛かな 正久」(15オ)  
 年々惜花 いく春にあかぬなけきをかさねけんつらきは花の心也けり 今井定翰  
 落花 かくはかり花に心を尽す身をあひも思はて散さくらかな 登波女  
     吹風に枝をはなるゝ花見てそ心も身にはそはず成ぬる 忠敏  
     とゝまらぬ春の日数にさそはれて風なき空も散るさくら哉 兼久  
     たくひなき木の下かけの旅寝かなしとねふすまを散花にして 太田道貴  
 夜落花 月影の動くと見えて袖の上にたまるは夜の桜也けり 鳩臺  
 夜思落花 あはれいかにものおもへとか俤に散かふ花のよるも見ゆらむ 忠敏  
 月前落花 うれしくも朧に月の霞むかなさやかに花のちらはうからむ 祐利  
 雨後落花 春雨の雲のかへしはさむからて雪に成行花の下陰 弘道  
 風前落花 春風に消ぬを花の印にて雪とのみふる山さくらかな 音空」(15ウ)  
     吹風に枝をはなれて飛蝶の数そふみれは桜也けり 宣光  
 落花隨風 花ちらす春の山風心あらは吹かへさなむもとの梢に 荻須景惇  
 无風花散 やよひ山暮行春の花見えて風のさそはぬ花も散けり 大石義篤  
 山落花 いのらすと春もはつせの山桜うつろふ枝にあらしふけとは 政弘  
     行春の末の松山風ふけは梢をこゆる花のしら波 古道  
     常ならぬうき世しらせてかくれすむ芳野の奥も散桜哉 登波女  
     高砂のをのへの風やさそふらん禁になひく花の白雲 辻柳子  
     みよしのゝ山の奥たに散花のうき世の中はのかれさりけり 古考  
 水上落花 つきてまたなかれぬはれは水上の花に嵐のたえまなるらむ 政弘

落花浮水 かし人のわたらはたえむ河水に嵐のかけし花のうき橋 釈知来」(16 オ)  
 湖上落花 朝つきやかた山さくら散ぬらしいふきおろしの末の白波 信由  
 海辺落花 世をうみの海人とやならん散うかふ花の筏よ我をのせなむ 忠順  
           こよろきの磯山さくら散比は空にも浪のたつかとそおもふ 釈千明  
 山家落花 かくれすむ山もかひなきうき世そとしらせ貞にも散桜哉 富田禱曼  
 落花似雪 つもりては是も跡こそいとはるれ散やさくらの花の白雪 大宮司守富  
 苗代 おくれしと水せきいれて小山田をかへすゝもいそく苗代 鈴木重生  
           谷川の水もゆたかに流れ出て末たのもしき小田の苗代 釈存暁  
 蛙 打わたす里の千町田末暮て霞の庭に蛙鳴也 忠敏  
 夕蛙 ゆたねまくあらきの小田の夕まくれそほふる雨に蛙鳴なり 山崎常美  
 呼子鳥 呼子とりよへととゝまる人もなし何をか山のかひに鳴らむ 亀井重範」(16 ウ)  
           霞たつ春の山への呼子とり声する方の花や尋ねむ 釈元翁  
           花散て人めたえにしみやまえに誰呼子鳥今も鳴らむ 村上世根女  
 躑躅 いはつゝしゆふくれなみの花はえて入日こかるゝ舟岡の山 重見  
           青柳のけふる末野のにつゝしはもゆはかりなる花に咲けり 重鉄  
 燕子花 なつかしきゆかりの花のかきつはたとへたてある名をはおひけむ 大炊子  
 山振 行春をゝしといはねの山吹もたをれは袖に露そこほるゝ 古道  
 河山振 橋姫のかさしにすらむ山吹をかけても折な宇治の川波 登波女  
           大井川峯の山吹なかるゝは筏の横や花にふれけむ 鈴木重愛  
 笹山吹 こえやらて春もしはしはやすらはむ咲や籬の山吹の花 忠順  
 藤 春山の霞男も面影にたちてにはへる藤波の花 繁樹」(17 オ)  
 名所藤 萬代をかけて咲らん藤波の盛久しき松か浦島 宮路可規  
 河辺藤 行春をしからみとめむ花みえて川瀬にうつる藤波の花 大須賀根長  
           物の部の八十宇治川に山吹と匂ひあらそふ峯の藤なみ 重世  
 池辺藤 春深き水の緑も紫に音かはりたる池の藤なみ 牧野常風  
 松上藤 年をへて花もかはらぬ老松の千よのかさしと咲る藤波 恒雄  
 春山 分いれは今を盛と咲花にかへさわするゝ春の山ふみ 加藤みえ女  
 春野 春の野はふり捨かたきけしき哉すゝなに蝶のとまれかくまれ 村上純  
 山家春 鶯の初音待得て山里の軒のたるひも今やとくらむ 窪田末智女  
 春の歌の中に  
           つほすみれつみはつくさし此夕落る雲雀やねくらまとはむ 酒井利亮」(17 ウ)  
           葉の花にこてふ飛かふ春の野はしつめかたしや人の心の 年之女  
           から猫のなくねふけゆくほそとのに梅か香にほふ春のよの月 忠順  
           桂川かつおり立てあゆくめは年魚はさやらで花そかゝれる 篤慶  
 惜春 花鳥に心つくしのはてゝゝは馴し春にも別れぬる哉 大炊子  
 暮春 桜花散にし後は暮残る日数も春の心ちこそせね 忠敏  
 暮春川 日数さへなかれゝゝて吉野川今はしからむ花たにもなし 宣光  
 暮春藤 花鳥の花音さそひて行春に立おくれたる宿の藤波 重見  
 暮春子規 しのひあへぬ初音もらせり子規いまた弥生の空おほくして 古道  
 暮春旅 故郷にいそくとすれと旅衣春の行にはおくれけるかな 深見志賀女

三月盡 鐘つきてとちむる春を知れともいぬし、まや山吹の花 恒雄」(18オ)  
 (白紙)」(18ウ)

夏

首夏 むかつをの霞はきえて散残る花もあらはに夏は来に覺 宣光  
 少女子が園生にうゝるひ扇の名もなつかしき夏はきにけり 千濤  
 おもかけに残る心の花の色も青葉になひく庭の朝かせ 深見専女  
 今朝みれはかすみの衣ぬき捨て山はみとりの色にかはれり 釈斐然

山家首夏 きふけふ花の人めもたえてけり山分衣春や過けん 信由

首夏田園 夏くれはかたなるなかこそすみよけれ門田のこなき園のたかむな 忠浄

首夏山吹 人みなはひとへのきぬにかへつれとやへ山吹は猶さかりなり 忠順

首夏藤 なつまでもたかゆるしたる色ならん木々の若葉にかゝる藤浪 楠正興

更衣 ぬきかへて香たに残らぬなつ衣うつき心と花やおもはん 古道」(19オ)  
 けふかふる夏の衣は雪と見し昨日の花のなこり也けり 登波女

朝更衣 下臥の木陰はなる、こゝちしてけさ白波の袖そかへうき 中島有員

更衣惜春 みそかけにかけとめてたに花染の袖のわかれを猶やをしまむ 忠順

餘花 残りてはまためつらしきさくら花はてをうしとは何かいひ釵 小林御楯  
 時ならぬ物はおとれる世のさかにもれたる色の遅さくら哉 公阿  
 なつ衣きてこそめつれ山かけのひはらかおくの花の一本 宮田眞則  
 鶯のかへるは夏の聲なからふるすの花は今さかり也 英棟

殘花少 とふてふをかそへそへても数なきはあらしにもれし木かくれの花 池田寛親

雨中餘花 山かけに風の残し、さくら花ぬれてやけふの雨に散らん 釈惠直

殘鶯 花はねにかへれと春の跡止めて鳥は古巢にとまらさり覺 長廣」(19ウ)

深山餘花 大木曾やをきそのおくを分みれは卯月そ花の盛なりける 菅沼定禱

新樹 花にみしその梢ともなつ山にまたこむ秋の色をこそ思へ 常業  
 おそさくら花ちりはて、夏山のしたかけくらく成まさる也 柴田重織  
 しけりあひて吹くる風はもらねとも若葉す、しき夏木立哉 西尾訓昶  
 きふ見し花のおもかけさらぬまに桜か枝は若葉さしけり 大橋宇羅女  
 おしなへてみつえさしつる色みれは夏はみとりの雨や降らん 安藤乗正  
 ゆつかつら若はの色もあかなくに香さへこほる、露の朝風 正久

新樹風 はたなれぬせみの羽袖もさむけきはみつえより吹露のあさ風 公阿  
 山姫の花のたもとを今朝よりはみとりにかへす風わたる也 早川千代女

社頭新樹 みつ枝さす木々のみとりを吹かへす風の宮居そ涼しかりける 水野重雄」(20オ)

新竹 去年おひしつらよりうへにぬけ出て一ふしたかき園のむら竹 公阿  
 ことしおひの庭の若竹うきふしをいつしり初て露こほらん 忠敏

卯花 神まつる卯月を時と咲みれはうへゆふしてにまかふうの花 鈴木孝本  
 しらなみの立かと見えておとなしの川邊つゝきにさける卯花 久野豊風  
 雪と見るいはかけ山のうの花にうすきぬさむき朝ほらけ哉 太田嘉香

夕卯花 待人の袖かとそ見るたそかれにほのゝ、しろき垣のうの花 忠敏  
 賤か屋のまかきの山はくれぬれと夕もしらすかをる卯花 村上忠直

夜卯花 くれぬれはあやめもわかぬ夕やみにうの花垣そ月になり行 登波女  
 垣卯花 なつかしきすみかなりけり山里は垣ねのかきり卯花にして 渥美志計起  
 里卯花 卯花の月のひかりに袖ぬれて分ゆく露の玉川の里 直温」(20ウ)  
 卯花似雪 きえ残るかきねの雪と見えなから袖さむからぬ庭の卯花 外山雪女  
 卯花似浪 しらなみと見しはそらめにあらさりき分れはぬれぬ露の卯花 忠順  
 灌佛 あひにあひて卯花くたしふりいてぬ龍やそ、くと思はかりに 公阿  
 加茂祭 ことなくてけふにあふひの誌かつら千世もか、れと猶いのる哉 古道  
 葵露 おのつからかさしの玉と成にけりあふひに結ふけさの白露 信由  
 氏人の心もつねにか、れとやあふひの露の清けかるらん 宣光  
 郭公 一聲を月になのりて久かたの雲のみねこす山郭公 亮泉  
 こ、ろにも猶こそか、れほと、きすなきて入ぬる峯のしら雲 宣光  
 ほと、きすそれかとたとる一聲をさやにこたふる山彦もかな 重見  
 五月雨はいふき高ねに雲とちてあさつ方わたりなく郭公 長廣」(21オ)  
 ほと、きすほのかにもらす一聲も心にかけてまては社きけ 釈寂雅  
 うた、ねの夢かあらぬかなきすて、行かたしらぬ山子規 浅野福女  
 待郭公 時鳥名のる山邊をしらませは尋行ても初音きかまし 孝本  
 よひのまのうの花月夜おもしろしまつ郭公一聲もかな 小瀧正賦  
 夜もすから待ともしらて郭公いつこの空の月に鳴らん 辻多豆女  
 連夜待郭公 子規まつ夜つもりて卯花の雪とふるまてなりにける哉 正興  
 郭公まつの木末にみしか夜のこよひの月もかたふきにけり 竹尾正寛  
 月前待郭公 ほと、きす思たえてもねられぬはこてふに似たる月夜なりけり 英棟  
 ほと、きす心もそらに待宵の月もつれなくかたふきにけり 吉野成功  
 雨中待郭公 ほと、きすきなかずとてもむら雨のふりすてかたき有明の空 政弘」(21ウ)  
 卯花に雨ふりそ、く此ゆふへいかてきなかぬ山ほと、きす 那須隆原  
 人傳郭公 あし曳きの山ほと、きす山にてはなきぬといふ人傳にして 西村満春女  
 初時鳥 たちはなの香にもらしけん郭公また里なれぬ初音なれとも 波多野淑女  
 ほと、きすはつかに初音聞しより空に心そあくかれにける 山本ちと女  
 待人の来ぬものゆゑに郭公おもはぬ夜はのはつねをそ聞 竹田文雄  
 始聞郭公 山かつとおもひおとさて子規あはれ初音をまつきかせけり 芳賀吉雄  
 郭公一聲 うれしくもつらくもあるか一聲のあとかたもなき山子規 横落幸信  
 郭公處々 身ひとつをいかにせよとか郭公このもかものに里わかつ鳴 真武  
 暁郭公 ほと、きす鳥の八聲に一聲をそへて過行あけかたの空 佐藤安全  
 夕時鳥 むら雨のそ、くゆふけのうらまさにひと聲名のる山郭公 千濤」(22オ)  
 夜郭公 みしか夜の夢のなこりの郭公またもうつ、に聲をきく哉 太田正成  
 ほと、きす今一聲と待ほどに早くもあくる夏の夜の空 外山成武  
 月前子規 むら雨の雲間まちえて郭公月よりさきに聲もらし梟 明  
 郭公なく聲ことにさやけさのそふこ、ちする山のはの月 忠順  
 五月雨のはる、雲まの月影に聲もらして行ほと、きす 釈了実  
 夢中郭公 ほと、きすかひなき夢の一聲も人待よりはうれしかりけり 登波女  
 時鳥なくとき、しはうた、ねの枕の山の夢にさりける 鈴木菅守

雨中時鳥 むらさめのふり出てなく郭公しはしはこゝにかさやとりせよ 釈徧空  
 山子規 けふよりはおのか五月と鳴聲もしけき青葉の山時鳥 長尾興督  
     入あひのかねにおくれてをはつせの山ほとゝきす月になく也 千代女」(22ウ)  
 名所子規 夜もすからおき居の里の郭公しのふはつねもきゝはもらさし 釈存梁  
     五月雨にぬれてなくなり子規佐野のわたりの夕くれのそら 松坂重澄  
 杜郭公 ほとゝきすしのたの杜のしのひねは神より外に誰かきくらむ 千濤  
     かた岡のもりの木末の下露に聲もしめらす鳴ほとゝきす 篤慶  
 江郭公 大くらや入江の月のおち汐に聲もなかれて行ほとゝきす 信由  
 海邊子規 こと浦になきてなゆきそ郭公たくひなにはの月を見すてゝ 多米女  
 浦郭公 卯花の色なるなみに時鳥いく浦つたひ鳴てすくらん 上妻良古  
 磯時鳥 しらなみのよするいそへの松かえにねをあらはして鳴子規 古道  
 山家子規 聞人もなき山里にほとゝきすあたら初音をもらしつるかな 石川良久女  
 古郷郭公 ほとゝきすなれもむかしをしのひねにふるき都を鳴て過らん 辻柳女」(23オ)  
 社頭子規 消残るもりのみあかしかすかにも初音をもらす子規かな 伊奈義方  
     しめのうちになく一聲は神ことかあらはにはなきはつ郭公 竹谷家固  
 閏五月郭公 めつらしくそはる五月の鳥の聲ことしはきかむ心ゆくまで 信由  
     今も猶おなし名におふさみたれのふり出てなく郭公かな 岩瀬依重  
 六月郭公 みな月もなかは過ゆく杉の戸になこりをしめと鳴子規 深見善恕  
 早苗 袖ぬるゝ田子かしわさはくるしくてよそめをかしくとる早苗哉 専女  
 月前早苗 若苗のふしたゝぬまとをとめらかうたのあらず田月にうゝ也 岡田甕孫  
 菖蒲 朝露の玉とみたれてあやめかる賤かたもとやまつかをるらん 常業  
     このまゝにひかまほしきは白露の玉えにおふるあやめ也けり 石川三尾女  
     しら露のすかる軒はのあやめ草あやしき宿も香に匂ふ也 忠明」(23ウ)  
 旅宿菖蒲 たひねともおもはさり梟をりにあひて結ふあやめの草の枕は 中山武定  
 五月雨 大空のみとりの色を庭のおもの苔にのみ見るさみたれの頃 重世  
     ほしあへぬ雲の衣をかけそへてはれぬ五月のあめのかく山 弘道  
     あしからや雲の八重山ひとへたにはるゝ空なきさみたれの頃 英棟  
 五月雨久 小山田をもるやかゝしのみ笠も朽ぬはかりにふるなかめ哉 御楯  
 連日五月雨 殿守のとものみやつこけふいくか清めぬ庭にさみたれのふる 千濤  
 河五月雨 芳野川みかさまさりて測もせもなみの花ちる五月雨の頃 多米女  
     沢田川高はしわたせ五月雨に袖つくはかり浅きせもなし 忠浄  
     さみたれはすめるも濁る飛鳥川かはるならひは測せのみかは 木川重瀧  
 沢五月雨 浪こゆる沢のふる草ほたるともならてや朽ん霖の頃 千濤」(24オ)  
 湖五月雨 しほならぬ海もをやまぬ五月雨にからきめみつとあまはいふ也 公阿  
 浦五月雨 汐くまぬ袖さへぬれてわひしきは浦の苦屋の五月雨の頃 義宣  
 橋上五月雨 五月雨にゆきゝとたえて白浪のこゆるおとのみ裏の橋 釈頭阿  
 閏月五月雨 さみたれの月もかさなる雨雲にいほのうちさへうるふころかな 公阿  
 橋 まきむくのたまきの宮の昔こそ花橋にとはまほしけれ 重瀧  
 橋驚夢 手枕のねさめの袖にかをる也夢よりなれし夜はのたち花 廣冬  
 棟 花あふちさけるを見れば藤なみの青はかゝりし梢也けり 信由

- しけりあふ野守か門の花あふち夏をよそなる風のすゝしさ 釈南陽  
 撫子 二葉より我なてしこもおよつけて色めくはかり花咲に鳧 政弘  
 あまつ日の色にはさけと撫子の花はすゝしき物にさりける 萱野景福」(24ウ)
- 百合 人ならば笠きせましを日をさふるかけもなつ野の姫百合の花 御楯  
 昼白 道の辺のてる日によれる草の中にたへてひもとく昼白の花 忠敏  
 夏草 日のかけにやかてよられんけしきとも見えぬ朝けの露の夏草 宣光  
 閑庭夏草 こむ秋を花にやつさむあらましも野となる庭の草に社しれ 全  
 行路夏草 夏野行みしますか笠誰ならんしける薄に見えかくれして 忠順  
 海辺夏草 笠にぬふ時はおくれつなには渦ほりえの小菅花咲にけり 鶯山  
 野夏草 ゆきかよふ人しなければ朝なゝゝ露のみむすふ野への夏草 加藤正柔  
 ひと夜寝しすみれの床は夏草のふかき野らとも成にける哉 忠敏  
 しけりあふ中に清水の音はかり埋れもやらぬ野への夏草 釈空阿
- 草花早 日は秋にうつらぬものを咲にけり夕立はれし庭の露くさ 公阿」(25オ)
- 水鶏 夏の夜はたゝく水鶏にはかられて天の戸さへやとく明ぬらん 登波子  
 夕月のかけまついほはしはの戸もさゝぬを何にたゝく水鶏そ 千代子
- 泊水鶏 ふしかぬる竹の泊の梶枕くひな聞つゝひと夜あかしぬ 釈蓮周  
 鷓河 あけぬとも鷓舟さゝはやなつみ川猶夜を残す山陰にして 忠敏  
 山かけは月の光もなつみ川こゝをせにとやうふねさすらん 廣冬  
 さもこそはうき世を渡るわさならめやみの夜にしもさすう舟哉 登波子  
 しまつ鳥う舟のかゝりきえはてゝ川なみ白くいつる月かけ 横井常弘
- 螢 夏草のしけきおもひのあまりてや螢はおのか身をこかすらん 釈亮仁(最後の一面なし)  
 なつの夜はやみもなかゝゝおもしろしもゆる螢の影さやかにて 宮路憲古  
 山川のうきすなからに夏虫のなかるゝかけぞ涼しかりける 栗田龍臣」(25ウ)  
 やり水の清き心をたつね来てふみ見る窓に飛螢かな 乗正
- 深夜螢 さ夜更て月はかくるゝ道しはの露を見せてもとふ螢哉 正久  
 雨中螢 雨そゝく夏野の草の葉かくれにぬれつゝもえて飛螢かな 木村正道  
 雨後螢 このころの雨に濁りし沢水もすゝしくすみて飛ほたる哉 細谷鉄子  
 叢中螢 夕月のいるまの野への草むらによるさく花はほたる也けり 祐巖  
 池螢 池水のみさひかきやり月まつとおり立袖にほたるとふ也 繁樹  
 いひいてぬふかき思ひは池水の庭にも見えてとふほたるかな 古道
- 河螢 風わたるかもの川なみすゝしきは影もみたれて螢とふなり 柴田重威  
 鮎つりて帰る河邊の夕やみの道のしるへは螢なりけり 宣光
- 湖上螢 ぬは玉のよるはにほてる海の上にかけをうつしてとふ螢哉 志水久純」(26オ)
- 江上螢 いさり火のかけかと見えてなにはえの芦のよすから螢とふなり 廣中養安  
 鳥螢 世中をはなれ小しまの螢たにもゆるおもひはある身也鳧 鶯山  
 田螢 夕風になひくさなへの末葉より露とみたれて散螢かな 重見  
 橋上螢 風わたる玉のをたえの橋の上に光乱てとふほたる哉 英棟  
 古郷螢 あればてゝ野となる庭は夏虫のすたくあたりや板井成らん 信由  
 草間螢 おもひ草露のゆかりや尋ぬらん尾はなか本にすかる螢は 常業  
 旅中螢 行くれし旅路のやみを心して照すは野へのほたるなりけり 楠田保子

- 夏月 夏といへは月の桂もしけるらんかけふむ道ぞ涼しかりける 大竹嘉衡  
 しらみけり竹の若葉の露の月す、しと見るもふしのまにして 繁樹  
 なにはかた入江のあしの短夜は見るほともなき月の影かな 草鹿砥宣輝」(26ウ)
- 夏月涼 白袴の袖にかさねて涼しきは更行月のきぬにそありける 美石  
 むすふへき物とはなしにす、しきはみ空にすめる月のをち水 忠順  
 夏の日もくるれば秋の色見えてす、しくてらす月の影かな 酒井忠知
- 雨後夏月 夕立のなこりの露の草むらに涼しくうつる月のかけかな 積順英  
 ゆふたちの名残の露に風見えて月もかけ散園のむら竹 正久
- 山夏月 ふしのねの雪にうつろふ影見ればたくひもなつの月の涼しさ 松窓
- 水邊夏月 おく露のふかえのまこも風過て散かけ涼し夏のよのつき 宣光
- 河夏月 よるかけて鮎子つらまし松浦川す、しきせ、の月もみかてら 真重
- 山家夏月 めもす、し軒の山水せきいる、かけひのたけの短夜の月 公阿
- 照射 あまの子か幸かへせんと思ふまととひしの火影たゆるよもなし 坂部政幹」(27オ)  
 ともしすと木の下露に立ぬれて明しなれたるますらをや誰 忠淨  
 さ夜更て消るともしの影よりも鹿の命そはかなかりける 木村宗全  
 あつさ弓入かたちかき夕月のをくらの山にともしさす也 伊奈義方  
 これもまた夢野の鹿の夢の世を渡るよすかにともしさすらん 千代女
- 蚊遣火 たてかぬるほそき烟にひきかへて夕くれきほふ賤か蚊遣火 大原長春  
 すむ月のかけくもるまでかやり火の烟いふせきなつの夕くれ 積祐賢
- 夕顔 暮か、る軒はのいやす月見むとあくればゑめる夕白の花 繁樹  
 こしきにはくもの巣かけるふせ屋にも夏をやつさぬ垣の夕白 宣光  
 むくらはふ賤か垣ねもこのころはよそめゆかしくさける夕顔 積英盛  
 みな月の照日をさけて夕かほの花はす、しき色に咲けり 深見篤志」(27ウ)
- 蓮 池のおもにうつる夕日のかけみれば露も色ある花はちす哉 亮泉  
 水の上はす、しかるらむてる日にも池の蓮そゑみさかえたる 正久  
 池水の濁れる中におひなから清くけたかきはな蓮哉 朝倉兼利  
 にこり江の濁りにしまぬ蓮葉にむすひし露は玉と見え鳧 積縁澄  
 おはしまにす、しの袂引かけて池の蓮の花見るやたれ 忠敏
- 蓮風 草香江の入江のはちす露清みかをるも涼し風にみたれて 年之女
- 氷室 つ、かなくけふたてまつる氷室守心とけてや立かへるらん 忠敏  
 夏しらぬ氷室の山をもる人は冬をときはの松の下陰 美祢女  
 尋いるひむろやちかくなりぬらん衣手さゆる枕の下かせ 積音阿
- 夕立 夏の野の草葉の露にす、しさを残してはる、夕立の雲 根長」(28オ)
- 夕立晴 夕立の過にしあとの梢よりしつくかつちる風のす、しき 積淨信
- 杜夕立 ふらぬまも風まつす、し夕立の雲のけしきのもりの下陰 弘道
- 海上夕立 すさましく波もひ、きの名に立て夕たちきほふ灘の汐風 宣光  
 はた、神おきになり行夕立にすさきの松の雲は晴たり 繁樹
- 行路夕立 草しけみ道たにわかぬ夏の野をあしとく過るゆふたちの雨 深見弘治  
 松かけにかさやとりする衣手を風こそぬらせ野路の夕立 大炊女
- 蟬 ふるうちは雨つ、みして夕立のはれまとよもす蟬の聲哉 登波女

雨はれて杜の木末を吹かせに露もおちくる蟬の聲かな 釈白空  
 夕立ははる、をまつの木間より又もしくはて蟬ぞ鳴なる 釈存暁  
 むら雨のはれ行空になく蟬のおつる泪やもりの下露 釈正翁(28ウ)  
 夏山をわかこえくれは木かくれに高く聞ゆる蟬のもろ聲 外山成愛  
 樹蔭 蝉 ゆふつく日かたふく山の松かけに今はと蟬の聲しきる也 正興  
 やくはかりあつき日の岡こえかねていこふ木陰に蟬ぞ鳴なる 宣光  
 扇 千尋ある竹よりなれる扇とてうへもす、しき風はやとれり 音空  
 閨中扇 風かよふあふきのつまもある物をひとり寐やとは何おおい釵 石川純孝  
 泉 立よりて我手にむすふさうしみのさら、夏と思はさり鳧 精磨  
 むすはねと涼しかりけり立よれば我かけうつる谷のまし水 深見富女  
 月前泉 すむ月の影す、しさにふた、ひは結はすなりぬ庭のまし水 千濤  
 松下泉 松かねにわきていつみのさけきは木末の夏のふかき也けり 公阿  
 松かけの岩かき清水庭すみて夏をもしらぬ秋風ぞ吹 深見英興(29オ)  
 泉為夏友 あつさをはよそになかせるまし水にましたる友はあらしと思 釈行阿  
 納涼 袖ひちてむすふ泉のいつくより秋のかよひて涼しかるらん 宮田則成  
 たちよればあつさもしはし忘井の水は夏にやもれてすむらん 亀井速夫  
 立よりて夏のゆふへの月かけを結ふ手涼しいさらゐの水 大橋菊女  
 はちす葉の露の白玉吹ちらし秋とあさむく風の涼しさ 彦坂千善  
 朝納涼 わき出る清水にうつる朝月夜あさましきまで涼しかり鳧 忠順  
 夕納涼 夕されは軒はの松のひまもりて月よりおつる風のす、しき 音空  
 人みな立いて、す、むたくれはあつさそ宿のあるし成らん 千濤  
 ゆふされは軒はの竹を吹かせの雨にかよへる音のす、しき 釈英弘  
 月前納涼 夜もすからむかへは月の影す、しかつらの枝に秋かせやふく 深見自明(29ウ)  
 松下納涼 す、しきは夏ともわかす夕月夜さすや岡への松の下かせ 宣光  
 端居してしてくれに、たる音きけは夏の夜さむし軒の松風 正久  
 水辺納涼 おもふとち岩もる清水結ひあけてす、しきあかぬ松の下陰 利善  
 月影をうつせる池のさ、なみに秋をよせくる風の涼しさ 忠浄  
 夕されは風もおちきて白波のよるせ涼しき山川の水 元亨  
 河辺納涼 いさ子とも鮎つりかてらす、まはや堤の木陰夏としもなし 三宅重武  
 むら芦の葉分の風の身にしみて夏としもなき川つらの宿 竹尾久女  
 浦納涼 つ、まる、物にもかまなす、しきの袂にあまる袖のうら風 古道  
 おもふとちあそひの浦の夕風に舟こき出です、むたのしき 辻村正平  
 江納涼 住の江の松かけす、し立よりて夏を忘る、かひや拾はん 井本常蔭(30オ)  
 橋上納涼 月にふく夜風す、しみ川橋をなかは渡りて立とまりつ、 繁樹  
 舟中納涼 みな庭になひく柳のかけ見えて風のうへこく舟の涼しさ 古道  
 夕風のかよふ芦間をこく舟は夏のほか行こ、ち社すれ 三沢真清  
 山寺納涼 す、しきのかきりなるらん山寺のちりなき庭をはらふ松風 正興  
 涼風不待秋 みな月のあつさをよそに吹風はいつより荻の上にたつらん 千秦  
 夏天象 降つ、く日数かさなる浮雲のあつさもしらぬ五月雨の空 草鹿砥延重  
 夏夜 かやり火のくゆるもよそにはらひけり夜深き窓の風の村竹 乗正

夏野 野は秋と何おもひけむ夏草のうらめつらしきさゆり撫子 忠敏  
 夏瀧 をのへより落くる瀧の水けふり立よるまなく夏そ流るゝ 公阿  
 夏鳥 そに鳥の鳴こゑ涼し川そひの柳かもとにゆきかへりつゝ 忠順」(30ウ)  
 夏花 わせうゝるかた山小田に引水のうなてのうはら花咲にけり 千濤  
 夏衣 むつましき友よりことにうらなきはなつの衣のひとへなり梟 木俣親常  
 夏燈 水そゝく庭の木陰にともす火はもゆる物から涼しかりけり 正久  
 夏居所 せきいるゝ水の心もすゝしけに見えてなかるゝ中川のやと 粕谷重熙  
 晩夏 秋ちかくなるをの松に聲たてゝゆふへ涼しき八重のしほかせ 忠敏  
 小薄もまたほにいてぬみな月の末野に秋を何まねき劔 忠順  
 むすふ手の雫もすゝし今日といへはかよふか秋もあすかるの水 弘道  
 六月祓 御祓する川瀬すゝしき秋風にあらふる神を吹はらふらん 大村英重  
 はらひすつる心のちりも河の瀬にめにこそ見えね流行らむ 小林茲恒  
 みそきしてかへる袂にたちにけりゆふへすゝしき加茂の川風 森田光尋」(31オ)  
 (白紙)」(31ウ)